少子高齢・人口減少社会を支える子を育む生活科・総合的な学習の時間の課題Ⅶ
― 小学校第５学年「私たちの大切な川」の実践を通して ―

馬居政幸[A]、田宮縁[B]、新村道弘[C]、○米津英郎[D]
静岡大学名誉教授[A]、静岡大学[B]、静岡県焼津市立黒石小学校[C]、静岡県富士宮市教育委員会[D]

１．はじめに

我々は、これまで本研究大会において生活科・総合的な学習の時間の実践に内在する問題点を整理し、子供たちが生活者となって生きていく少子高齢・人口減少社会の特徴と課題、並びにその課題を解決する上で必要となる資質について提案してきた。

本発表では、これまでの研究成果を受け、平成 26 年度における富士宮市立内房小学校での米津の授業実践を見直し、人口減少社会を生きることを余儀なくされる子供たちに対し、生活科・総合的な学習の時間を通して身に付けさせなければならないと考える資質について提案する。その上で、これからの生活科・総合的な学習の時間の課題と可能性を示す。

２．授業実践の概要

分析対象の実践は、平成 26 年度に米津が取り組んだ内房小学校第５学年○名による「私たちの大切な川」である。学区を流れる川を学習材として取り上げた。

４年生の時に「川に生息する生き物」を調べた子供たちは、人々の生活と川との関わりに関心をもつようになり、昔の人々の生活について追究を始めた。

「橋がなかった頃の生活」について調べた子供たちは、渡船を利用して川を渡っていたことや、川船で米を運んだことを突き止めた。そして、復元された川船や渡船場を見学した。この活動を通して、橋がなかった頃の人々の苦労に気付いた。

「川に関する災害」について調べた子供たちは、川が氾濫して家が流されたり、死者が出たりしたことを突き止めた。そして、水害から人々を守るために護岸工事をしたり、高台に家を建てたりしてきたことに気付いた。

そんなときに、台風○号（□月△日）により川に架かる二つの橋が流されるというアクシデントが起きた。一つ目の橋は橋の中央部が流され、もう一つの橋は土砂ごとすべて流されてしまった。この現実を目の当たりにした子供たちは、追究内容を変え、橋の調査を始めた。流された橋を調査したり、工事をしている人に聞き取りをしたりして学びを深めた。

さらに、橋が流されて困っている人たちが多くいると考え、子供たちは保護者○名にアンケート調査を行った。しかし、調査結果は、子供たちの予想とは違い、橋が流されて困っている人は１０名ほどであった。その１０名の人たちのために、橋を直してほしいと考えた子供たちは、区長さんを招き、自分たちの考えを伝えた。

今後は、橋がどのように直っていくのか見守っていくとともに、人々を水害から守る方法について追究していきたいと考えている。

３．結果と考察

本実践の成果は、予期していなかった出来事に対して、投げ出すことなく最後まで子供たちが追究を行ったことである。なぜこのような意欲と行動が生まれたのか。

今後、少子高齢・人口減少の更なる進行で危惧される社会環境の急激な変化に、柔軟に対応していける力を子供たちに育むためにどのような総合的な学習の時間を行えばよいのか。上記実践と子どもたちから学んだことについて、資料と共に発表時に提示したい。

少子高齢・人口減少社会を支える子を育む生活科・総合的な学習の時間の課題Ⅷ

― 子ども子育て支援新制度実施過程から見えてきたこと―

○馬居政幸[A]、田宮縁[B]、新村道弘[C]、米津英郎[D]
静岡大学名誉教授[A]、静岡大学[B]、静岡県焼津市立黒石小学校[C]、静岡県富士宮市教育委員会[D]

１．はじめに

我々は、上記主題により、本研究大会において、7度にわたり実践報告を行ってきた。その成果の整理・再検討に加えて、より鮮明になった人口減少の進行に伴う時代と社会の変化に応じた学校教育改編の新たな課題の考察を、授業実践を重視する観点から試みてきた。その中間報告として、本発表では、本年4月から実施段階に入る「子ども子育て支援新制度」かかわって、人口減少時代を生き抜く子どもたちに必要な力を育むことを志向する生活科と総合的な学習の時間の新たな課題について発表する。

２．総合的な学習の時間の新たな課題

総合的な学習の時間は、地域素材を取り上げ、①課題を設定する力、②体験や情報を生かして課題追究する力、③他者と協同・協力して課題を解決する力、④学んだことをわかりやすく伝える力、⑤自分の学びを的確に評価する力を育成することをねらいとして、どの学校も年間計画に沿って計画的に学習を行っている。このことは総合的な学習の時間を充実させるための必要条件である。しかし、十分条件を満たすには課題が残る。2点指摘する。

一つ目の課題は、年間計画に沿うことを重視するばかりに、子どもたちの思考に沿った学習が行われにくくなっているということである。前述した力は、子どもたちの主体的な活動の中で育成される。したがって、子どもたちの課題意識に沿った学習が求められる。年間計画に沿いながら、社会の変化を捉えて、子供たちの思考に沿った柔軟な学習が必要である。

もう一つの課題は、前述した５つの力だけでは、これからの社会を生きていく力を育成することはできないということである。子どもたちが生きていく社会は、言うまでもなく少子高齢・人口減少社会である。特に人口減少の進行は社会システムや労働体制等、様々なレベル（多様・多元）での変化を生じさせる（可変）。この多種・多元・可変という時代と社会の強制に適（抗）して生きるための力の内実とその育成方法を明らかにする必要がある。

この二つが、総合的な学習の時間の新たな（本来の？）課題である。

３．人口減少が強いる時代と社会の変化の要請とは

日本社会は2005（平成17）年を超える時期に人口減少時代に入ったことが各種調査によって確認された。その必然として、学校教育を支える社会的基盤の変化を避けえない。

その第一は子どもの生きる場の縮小。団塊ジュニアが生まれた1970年代、全世帯の半分に18歳以下の子どもがいた。今は約2割。隣近所に異年齢どころか同年齢もいない。これに晩婚化が重なり、親子双方の孤立に応じる保育と教育のシステム再編が喫緊の課題。

その第二は格差の拡大。世代間（生産年齢vs老年）と世代内（正規vs非正規）と地域間（大都市vs地方）の格差を縮小させる社会システム全体の再設計を避けえない。

その第三は産業構造の変動。１次４％、２次23.7％、３次72.2％が2010年国勢調査による産業別就業者割合。特にサービス業（卸・販売、医療・福祉、宿泊・飲食）の拡大が顕著である。子どもたちの未来の生活基盤となる力と学力との乖離が確認できよう。

この三種の変化に応じ（抗す）る力の内実と生活科・総合的学習の新たな課題について、静岡市の認定子ども園開設準備過程で得た分析枠により、資料とともに本発表で提示する。